

『総合文化研究』第四号発行にあたって

総合文化研究所所長 亀山 郁夫

『総合文化研究』第四号をここにお届けする。

総合文化研究所が誕生して五年。二〇〇〇年夏の府中キャンパス移転は、まさにそれを寿ぐ記念すべき行事だったといつていい。四部屋からなるゆったりしたスペースが何よりも嬉しく、これから少しずつ設備、インテリア等も充実していきたい。しかしこの喜ばしさを、落ちついた空気に包まれた武蔵野の地に閉じ込めることにはならない。主に総合文化講座所属の教官からなる本研究所は、バラエティ、ユニークさ、そして何よりもクオリティの点で、今後わが国に誇りうる研究所の一つになるだろうと予感する。そしてその実力を広く世界に知らしめるためにも、われわれ自身のためまぬ努力と、ジャンル横断的な想像力が必要とされてくる。二〇〇一年を新たな元年とし、今後ぜひとも、武蔵野と世界の双方向に向かって幅広く開かれた研究所にしていきたい。

『総合文化研究』四号は、その意味でも本誌の新しい可能性を切り開く第一歩となった。一昨年、岩波書店から刊行された牛島信明氏による『新訳ドン・キホーテ』の訳業をお祝いするかたちで、セルバンテスを中心とする特集号が組まれることになった。現代の世界文学をリードする三人の作家ミラン・クンデラ、フアン・ゴイティソロー、ウンベルト・エーコの三氏からご寄稿頂けたことは、まさに僥倖というほかない。一般の読者からも必ずや大きな反響を得ることができると確信している。また、一昨年の公開講演で来校頂いた東京大学の松浦寿輝氏から現代詩をめぐる貴重な原稿を頂くことができた。記して感謝したい。

昨年の秋には、『迷路と無限——海にとけるトポス』と題する公開シンポジウムを開くことができた。和田忠彦、松浦寿夫両氏のプランニングにより、建築家の鈴木了二氏、東京大学の小林康夫氏の二人を学外からお招きしての、文字通りジャンル横断的かつスリリングな内容だった。ご後援を頂いた国際言語文化振興財団に対しても、かわらぬご好意に心からお礼を申し上げます。

二〇〇〇年はまた、前所長の西永良成氏が、ポール・ヴェーヌ著『詩におけるルネ・シャール』の翻訳で、第七回日仏翻訳文学賞を受賞されるという喜ばしい出来事もあった。われわれ所員にとってつよい励みとなったことを最後に記しておきたい。